

令和5年

6月の重要農作業

四国中央市農業振興センター

《問い合わせ先》

四国中央農業指導班

(畜産) 東予家畜保健衛生所

TEL 23-2394

TEL (0897) 57-9122

【作物】

1 早期水稲の管理

- (1) 中干し：6月上旬頃(出穂35～40日前)から、必要茎数(約18～20本)/株が確保され次第、足跡が軽くなる程度に行います。中干しの目安は約7～10日間で、圃場により土の乾き具合が異なるため、土壌条件に応じて連続または間断での中干しをしてください。
- (2) 追肥：根の活力を高めるため、出穂40日前頃にPKミックスを20kg/10a施用してください。

2 普通期水稲の管理

- (1) 品質向上対策
登熟期(特に9月)に平均気温26～27℃以上の高温になると、腹白粒・乳白粒など白濁した玄米(白未熟粒)が発生して品質が低下します。対策として、田植時期は6月中旬以降として、無理な早植えは避け、株間22cm以上(45～50株/坪)の植付けとし、日当たり・風通しを良くしてください。
また、こまるは、田植時期を6月1日～15日頃までとし、あまり遅植えにならないようにしてください。栽植密度は、過度の疎植にした場合に、青未熟粒の発生割合が多くなりますので50株/坪程度としてください。
さといも・やまのいも等野菜作付け後では、基肥量を減らしてください。
- (2) 病害虫防除
「箱維新粒剤」を1箱当たり50g施用(移植当日)してください。
いもち病、紋枯病、イネミズゾウムシ、ツマグロヨコバイ、ニカメイチュウ、イネツトムシ、ウンカ類、コブノメイガの総合防除剤です。
- (3) 水田雑草防除(除草剤散布)

農薬名	使用時期	使用量/10a	使用回数
エンベラージャンボ	移植後～/ビエ3葉期	25g/バッグ10個	1回
ジェイフレンドフロアブル	移植後5日～/ビエ3葉期	500ml	1回
カチボン1粒剤51	移植時・移植後～/ビエ2.5葉期	1kg	1回
天空1粒剤	移植時・移植後～/ビエ3葉期	1kg	1回
クサトツタ粒剤	移植時・移植後～/ビエ2.5葉期	3kg	1回
ガンガン豆つぶ250	移植後3日～/ビエ2.5葉期	250g	1回

【使用上の注意点】

- ア 高低差がないよう均平に耕起・代かきし、丁寧に畔塗りして漏水防止に努めましょう。
- イ 除草剤散布後3～4日間はそのまま湛水を保ち、田面を露出させないようにしましょう。
- ウ 除草剤散布後7日間は落水、かけ流しはしないようにしてください(田面が露出し、入水が必要な場合はゆるやかに入水しましょう)。
- エ 藻類の発生が多い場合は、薬剤の拡散が妨げられるので、ジャンボ・フロアブル・豆つぶ剤は注意しましょう。

【野菜】

1 さといも

- (1) 疫病対策
・梅雨期の連続降雨に注意して防除を行ってください。
・**【平均気温25℃以上の高温と連続降雨】**で発病し、被害が拡大します。
・ベンコゼブ水和剤を予防散布し、初発確認後ダイナモ顆粒水和剤を散布します。

農薬名	散布濃度	収穫前日数/回数	使用上の注意
ベンコゼブ水和剤	500倍	収穫7日前まで/2回	予防効果がある。 高温多湿時葉害を生じるおそれがある。
ダイナモ顆粒水和剤	2,000倍	収穫21日前まで/3回	予防および治療効果がある。 感染直後でも、病気の蔓延を阻止。 連用すると耐性菌が発生しやすい。

注意点：葉害防止のため、防除は灌水後夕方に行う。
展着剤まくびか10,000倍を加用すると薬剤がよく付着し、防除効果が上がる。【倍数を厳守】

(2) 全期マルチ栽培

- ア 土入れ(マルチの上に土をのせる)
子芋、孫芋の肥大・品質向上『奥芽芋、たけのこ芋、青芋の発生抑制』とマルチ内の地温上昇を軽減するため、5月下旬～6月中旬頃に一輪管理機等でマルチ上に土をのせてください。

イ 害虫防除

- ハダニ類の発生時は、コロマイト乳剤1,000倍で防除してください。

(3) マルチ栽培

- ア おおなか(化成体系)
子芋の発生開始期に、おおなか作業を行ってください。目安は5月下旬～6月上旬頃です。

イ 追肥

- 「MB粒状固形」を80kg/10a施用してください。

(4) 露地栽培

- ア おおなか(長期緩効性肥料体系又は化成体系)
子芋の発生開始期に、おおなか作業を行ってください。目安は6月中～下旬頃です。

イ 追肥

- 長期緩効性肥料体系は「菌根甘」を40kg/10a又は化成体系は「MB粒状固形」を80kg/10a施用してください。

(5) 害虫対策

- コガネムシ類幼虫対策として、おおなかで「オンコル粒剤5」を9kg/10a施用してください。
ハダニ発生時には薬剤散布(全期マルチ栽培と同様)してください。

2 やまのいも

- 2本以上萌芽している株は、早いうちに1本にします。また、株もとに光が当たるように誘引し、蔓がむらなく繁茂するように蔓直しをしてください。

3 排水対策

- 例年、6月中旬頃から梅雨を迎えます。溝に雨水が溜まらないよう、排水を徹底してください。 <可部>

【果樹】

1 温州みかん

- 着果量に応じた管理を行い、果実の肥大促進と次年産用結果母枝の確保により、高品質果実の安定生産に努めてください。

(1) 着果量が少ない樹

養分競合による生理落果を抑制するために、着果部周辺の強い新梢の芽欠きや被さり枝の除去を行い、幼果とその周辺の受光環境を向上させてください。粗摘果は中止して、仕上げ摘果や樹上選果で着果量を調整します。

(2) 着果過多の樹

早期の摘果で夏芽の発生を促し、樹勢維持と次年産用の結果母枝の確保を図り、隔年結果の防止に努めてください。

- ・早期(一次落果終了後の6月下旬頃)に樹冠上部1/3を全摘果。
- ・速やかに夏肥施用(窒素成分量5kg程度/10a)。
- ・発生した夏芽はミカンハモグリガの防除。

2 中晩相類

(1) 摘果

中晩相類の大玉果生産には、肥大が旺盛な生育初期の摘果が効果的なことから、着果が多い樹から摘果を開始します。

着果が多い樹は、一次落果終了後から摘果を始め、粗摘果は概ね60葉に1果残す程度とし、葉数が5～7枚の有葉果を主体に着果させます。また不知火は、7月上旬までに全摘果量の8割程度を目標に摘果します。

(2) 施肥(夏肥)、灌水

新梢の充実、幼果の肥大促進と樹勢維持を図るために、夏肥を施用します。(伊予柑・甘平・不知火等は6月下旬に窒素成分9kg/10a、愛媛果試第28号は6月上旬に窒素成分8kg/10a)
土壌が乾燥する場合は、灌水を実施し、肥料の吸収を促してください。

3 病害虫防除

- かいよう病と黒点病の感染に注意し、薬剤散布を徹底してください。
カイガラムシ、カミキリムシ、ハダニ・サビダニも防除してください。
- かいよう病：6月下旬～7月上旬。ICボルドー-66D200倍(高温時散布は葉害を生じることがある。夏季マシン油散布14日前までに散布)
 - 黒点病：落弁後の第1回散布後、200～250mmの累積降雨または30日以内に2回目散布。ペンコゼブ水和剤600倍。 <可部>

【花き・花木】

1 アネモネ、ラナンキュラスの掘上げ

- 掘上げ適期は摘花のピークから40～50日後、葉が黄化し始めた頃です。若掘りは発芽率低下の要因となります。掘上げ後は、日陰で十分乾燥させた後、手でもみ込み、根と土を除きます。
また、乾燥機を使用する場合は、28～30℃で約40時間を基準とし、必ず一日に数回混ぜるようにします。

2 シキミ

(1) 炭そ病

葉の縁から褐色の不定形病斑が形成され、激発するとほとんど落葉します。5～8月に発生が多くなります。発病した茎葉は早めに取り除いてください。

(2) シキミグンバイ

体長は4～5mm程度で、葉裏に寄生して吸汁加害します。被害葉は表面が白いカスリ状になる他、葉裏に糞や脱皮殻が付着し外観を損ねます。4～10月まで繁殖を繰り返すため、発生圃場では初回防除から1～10日後の再防除が効果的です。葉裏によくかかるように散布してください。

(3) フシダニ類

体長は0.15～0.2mm程度で、葉に寄生して吸汁加害します。被害葉にはモザイク状の輪紋が発生し外観を損ねる他、葉の黄化や奇形葉を誘発します。

(4) 防除薬剤

6月下旬～7月上旬に、定期防除として殺菌剤のベンレート水和剤2,000倍、殺虫剤のオルトラン水和剤1,000倍、ダニ剤のピラニカEW1,000倍を混用散布してください。

ミツバチの巣箱の近くや、茶園や他の作物が隣接して栽培されている場合は、農薬の飛散に十分注意してください。 <佐津間>

【畜産】

梅雨を迎え、湿気と暑熱両面の対策が重要な時期になりました。今年の夏は暖かい空気に覆われやすいため、気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並みの見込みです。暑熱対策は**早めの対策をできることから実践**していきましょう。

暑熱対策の基本は、人の熱中症対策と同じで、①環境温度を下げる、②脱水症状防止のための水分補給、③ごはん(エサ)を食べやすくする、の3つが重要なポイントです。

(畜舎内環境の管理)

換気扇の動作確認や消耗部品の点検を行い、夏場の故障を避けるようにしましょう。また、畜舎内に家畜糞尿を放置するとアンモニアなどのガスが発生するほか、その発酵熱で畜舎が熱くなり、人にも家畜にも悪い影響を与えます。畜舎内の除糞や換気をこまめに行いましょう。

(給水ニップル等配水の確認)

飲水量が不足すると、豚は食塩中毒(餌と給水のバランスを崩すことによる)、牛は水中毒(断水直後の多量給水による発症)を起こすことがあります。猛暑に入るとより多量の給水が必要になりますので、この時期から給水ニップルや給水カップの破損、詰まり等の点検をしてください。与える水は長時間溜め置かず、低温で新鮮な水の補給に努めましょう。

(飼槽の管理)

暑くなる食べ残した飼料は短期間のうちに変敗しやすいため、飼槽の四隅に古い配合飼料の残さがある場合は取り除き、少量を多数回に分けたり、涼しい時間帯に給与したりするなど、1日に必要な量の新鮮な餌を与えてください。それだけで家畜の嗜好性がアップします! <平野>